

編集後記

最近、国内外の研究会に出席する機会が増えた。それは自分が良い研究をしているというよりも、21世紀COEや科研費などの各種プロジェクトがらみの研究会が増えたのが原因だと思う。それぞれ立派な研究会だとは思いますが、内容や出席者は似たりよったりだし、プレゼンテーションの準備やプロシーディングスの作成もあるため、全てに参加しては本業の研究が全く進まなくなる。また、国立大学独法化のあおりをうけてやたら資格をとらされたりして時間を奪われている。日本の研究者にあうと例外無く「かくかくしかじかで忙しい」という話になるので、余裕をもって、かつ集中して研究に打ち込むことは殆どの人にとって難しい時代になったのだろう。

このようにせわしい研究環境では、現在の研究とかなり異なる分野の講演会を聞くような時間的、精神的余裕がなくなる。しかし、これは大きな問題だと思う。既にある「森」を豊かにしていく研究も重要だが、何も無いところに木を植え、水をやり、最終的に大きな「森」を造るような研究こそがより重要であり、真の独創的な研究といえるからだ。「森」を造るためには純血主義では駄目で、異分野の研究から知識を得たり、融合したりとすることが必要であろう。海外に目をやるとこんな例がある。私が以前留学していた米国の大学の化学教室では教授が毎週一回もちまわりで外から研究者を呼び、講演会が開かれていた。その講演会にはだいたい全ての教官が参加していた。また学生は出席が必須でそれが単位になるシステムであった。強制参加というやり方の是非はともかく、異分野（化学といっても無機化学、有機化学、生物化学、と千差万別である）の知識を得るには絶好の機会であると思う。

さて本誌では「化学からみた物性物理」というシリーズで、化学寄りの研究者からの原稿を数号に一回の割合（不定期）で掲載している。本誌の読者は物理寄りの人が殆どであると思われるが、このシリーズが異分野コミュニケーションの良い場所となってくれば喜びである。研究分野としての化学と物理の違い（外見の違い）だけではなく、化学屋と物理屋の物事に対する取り組み方（思考回路）の違いも感じていただけるのではないだろうか。

（直交ダイマー）